CISJ NEWS
A Publication of the Clinical Impoant Sociery of Japan
January 2017

ご　挨　拶

一般社団法人
日本インプラント臨床研究会
会　長
田　中　譲　治

新年のご挨拶

新春を迎え、会員の皆様にはつつがなく新春をお迎えになられたことをお慶び申し上げます。日頃からの会へのご理解とご協力のおかげで、さまざまな事業が無事に運営されていることに心から感謝とお礼を申し上げます。

さて、超高齢社会のフロントランナーである我が国において、歯科医療・口腔保健が健康長寿の延伸に直接つながることが認識されてきております。口腔ケアにおいても、千葉大学病院の10年間リサーチから口腔ケア群の方が非管理群より明らかに入院日数が少ないということが示されたことなどから、医療界においても口腔ケアの重要性が脚光を浴びております。このような中、咀嚼改善に優れるインプラントの普及率の推移を調べてみると、リーマンショックそしてマスコミによるネガティブ報道による低迷も2014年ごろより回復してきて、現在では年間50万本近くまで使用されるようになってきております（ピークの2008年は約65万本ですが、当時の設計の多くに1歯1本があったことの考慮が必要と思われます）。ここで、注目すべきデータに各国比較の1万人あたりのインプラント本数があります。日本は44本と報告されておりますが、昨年第27回アジア口腔インプラント学会が開催された韓国ではなんと255本とのことです。日本におけるさらなる普及が期待されます（イタリア192本、スイス145本、スウェーデン133本、米国54本、中国1本）。当会はインプラント界を先導する日本を代表する研究会の1つとして、インプラント治療の信頼性を確実に取り戻すとともに、健康長寿につながる優れた治療であることを実証し、正しくインプラント治療を広く普及していくことが責務と思われます。

本年も全員発表研修会（7月16日、17日熱海）をはじめ数々の研修会やイベントをおこないます。新年1月には「長老の話を聞く会」が開催され、当研究会そしてインプラント治療に対するフィロソフィーを若い先生にも是非学んで頂き、10月29日には「要介護におけるインプラントを考える会（仮）」という大会を企画しており、インプラント治療をあらためて見つめ直しインプラント治療が誰からも優れた治療法と認められるように、さらなる探究と研鑽を積んで頂く機会にして下されば幸いです。

今年の干支は「酉（とり）年」です。酉の由来に「果実が極限まで熟した状態」というのがあり、物事が頂点まで極まる状態を示し、また、酉（とり）は「取り込む」につながるといわれ、商売繁盛につながるともいわれております。会員の皆様方のさらなるご発展とご活躍を祈念いたしましてご挨拶とさせて頂きます。